

「人権講話」を行いました！！

11月16日(木)に「見えない心の傷 いじめについて考えよう」と題した人権講話を実施しました。講師は大河内祥晴さんです。

大河内さんは、1994年の11月、当時中学2年生の息子清輝さんをいじめで亡くしました。清輝さんの亡くなった後、いじめで苦しむ子ども達のためにいじめの残酷さに気付いてもらうための活動や、いじめで悩む子どもたちと手紙などで交流する活動も行ってみえます。

今回の講話の中で、いじめられる側の気持ちを考えてもらおうと、寄せられた手紙の一部などを紹介してくださいました。清輝さんが残した遺書や幼いころの楽しい思い出をつづったノート、家族の名前を書いた折り鶴...、話が進むにつれて目に涙を浮かべる生徒もいました。

『いじめは、たとえなくなっても、その後も「心の傷」として深く刻まれます。心の傷はなかなか他人には見えません。しかし、当事者が、周りが、いじめに「気づき」、「考える」ことでのぞくことができます。まずは自分が周りの人の心に近づいてみてください。そうすることで、卒業するときには「いろいろあったけど、みんなと離れたくない。」と思えるのです。』

そう思えるような関係になるためにはどうすればいいのでしょうか。一度考えてみてください。



「見えない心の傷
いじめについて考えよう」
大河内 祥晴様

(↓↓以下は、生徒の感想の一部です↓↓)

今回の講話を聞いて、いじめについて考えることができる
良い機会になったと思われました。いじめとは見えるだけのもの
かではなく、見えにくいものかという点、だから余計にいじめ
てる側も周りには見えにくいからとか、あよとぶさけてた
だけという理由で、やっつけていたのかもわからないと思われました。
もし、そういう場面になったら、周りの人が見見ぬ振り
しても、自分だけはどの子の味方かという点も思われました。

先々からしか、人の命の重さを知ることができません。
ただ、先々からでは何も伝えられないし、話を聞くことも
できない。
何かに傷ついたり、困っていたらぐっぐいであげらやうに
なりたいて。今までの時間を大切に、旧旧を後悔
のないように生きていきたいです。
今日改めて、命の大切さについて知ることができたので、本当に
良い時間になりました。

おじさんの話しで木下君の手紙で暗くてせまい場所での
なさが落ちて、心のやまの場所になたというのを聞いて
どういふ場所かしか自分の心が安心する所かたな、ていうほど。
追いつめられていたんだな、と思。もし自分や自分の周りにいる人たちが
どうなってしまうときに、はやいうちからそれに気付いて助けあう
人になりたいて。それ以前に絶対にそんなことにならないように
そんなことが始まればおなじようにしっかりと周りを見て気にかけていたかと思いた。

今日の話聞いて、とても怖いことだなと思いました。
話の内容が、自分が想像していたことの何倍もひどくて、
なんで同じクラスの仲間になんなことかできるのか理解が
できませんでした。
なので今あるクラス、今まですごしてきた場所がどんなに
自分にとって幸せだったのか、とても分かりました。これから、
自分がやる側にも、やらぬ側にもならないよう頑張らばいいなと

思いました。

<↓↓この度の行事が新聞に掲載されました↓↓>

平成 29 年 11 月 17 日（金） 中日新聞朝刊



いじめ受けた子心に傷

大河内さん、高校生に講演

中学二年だった息子「づつた」の折ったノートや、家族をいじめで亡くした西尾市の大河内祥晴さん（左）が十六日、稲沢市の杏和高校で「見えな

いことを口に出せず、こらえて命をつないでいたのだと思う。気付いてやれず、本当に恥ずかしくて申し訳ない」と語った。

大河内さんは「いじめられている子の心の傷はなかなか見えなけれど、周りが気づき、考えることでのぞくことができる。まずは自分が周りの人の心に近づいて」と訴えた。（鈴木あや）

い心の傷 いじめについて考えよう」と題して講演した。

大河内さんは「つら

いことを口に出せず、こらえて命をつないでいたのだと思う。気付いてやれず、本当に恥ずかしくて申し訳ない」と語った。

人権週間（十二月四

づかしくて申し訳ない」と語った。

い」と語った。

が招き、全校生徒七百

清輝さんの死後、いじめに悩む子どもたちと手紙などで交流してきたといい、いじめられる側の気持ちを考え

てもらおうと、寄せられた手紙の一部を紹介した。中には、いじめ

清輝さん「当時（二〇〇

きたといい、いじめられる側の気持ちを考え

てもらおうと、寄せられた手紙の一部を紹介した。中には、いじめ



清輝さんの遺したノートを手に見る
大河内さん（稲沢市の杏和高校で）